公益社団法人　上伊那教育会

平成２８年度　第４回　総 会

◇日　時：平成 29 年 1 月 31 日（火）　　◇場　所：上伊那教育会館講堂

《　次　第　》

1　開　　会
2　上伊那教育会の歌『仰望』
3　会 長 挨 拶
4　報　　告
（1）信濃教育会常任委員会報告　（小林 会長）
（2）信濃教育会臨時総会報告（飯澤 常任委員）
（3）上伊那教育会理事会報告　（小林　会長）
（4）県外教育関係機関研修報告座談会報告（飯澤 常任委員）
（5）第 35 次回日中友好長野県教育者訪中団 報告（清水慶一 会員）
5　協　　議
（1）「あり方委員会」答申について（伊藤　常任委員）
（2）上伊那教育会諸事業の充実改善に関する意見・要望について
（大日野 幹事長）
（3）「公益社団法人　上伊那教育会　定款・諸規定一部改定」について
（小林会長）
（4）ホームページ・グループウェアの運用管理規定の思考について
（小林会長）
（5）「上伊那誌自然篇改訂増補版　編纂作業」について
（川村常任委員　熊谷常任委員）
6　諸　連　絡
（1）平成 29 年度教科等教育研究会の発足に向けて（飯澤 常任委員）
（2）研究紀要 38 集配布について（川村 常任委員）
（3）平成 29 年度教育関係年間計画の作成について（大日野 幹事長）
7　閉　　会

協　議　か　ら

※以下の協議内容は一部抜粋です。詳しくお知りになりたい方は，各校の代議員の先生が詳しい資料をお持ちですので，そちらをご覧下さい。

あり方委員会答申

・伊藤正通常任委員より，次のように答申が提案された。

①　会員の資質向上に向けた三大研修のあり方

哲学研修は，代議員による若手の参加の呼びかけ，担当支部またはレポーターの学校職員によるレポートの共同作成，会員が参加しやすい研修内容を模索したい。

文学研修は，参加しやすい内容と雰囲気があったとされる本年度の取組を継続したい。

授業研修は，具体的な事例から，学級づくりに研修範囲を広げていきたい。

②　諸事業の精選・重点化・再構築について

職能研修事業の充実を図るため，例年の踏襲にならず時流に見合う実質的な委員会となるべく，事業の見直しを行っていきたい。

６３号の歴史ある「上伊那文集」を廃刊し，作文の保存と作文指導の参考の役割を残した小中１冊の作品集としてまとめていくこととする。

県外教育関係機関研修は，研修場所の希望を募り決定すると共に，研修成果の共有により実践の見返しに資することが望ましい。

③　「出会う かかわる つなぐ」教育会の具現について

代議員は使命を理解し，職場とのパイプ役となっている。２人いる学校は，１人を若手にし，活性化を図る。各校で総会の報告会を設けていくようにしたい。

上伊那教育会の会員増加のため，各職場の同僚生を高め，先輩会員が若手を誘う気風を大切にしたい。

三大研修のほか教育会職能研修事業が，初任研，経年研，キャリアアップ研の単位として認定。活用していきたい。

上伊那教育会諸事業の充実改善に関する意見・要望

会員の皆様からのご意見

○三大研修について，文学研修は，野溝先生を講師にお迎えし，５回の読み合わせを行った。「芥川賞と現代作家たち」をテーマに，「ぶらり芥川賞作家たち」として５人の芥川賞作家の作品について語り合うことができた。これまでに手にしたことのある作品も多く，読み合わせには毎回，３０名以上の参加があった。今後も，より親しみやすく参加しやすい研修会になることを願う。

県外視察研修について，実際に参加できなかったり，報告座談会に出席でなかったりしても，雑誌「上伊那教育」に詳しい報告記事が掲載されていて，参考になった。子どもたちにとってよいことは，自校でも生かしていきたい。今後も県外の先進事例について情報提供していただけるとありがたい。

○児童生徒育成事業の鑑賞事業について，意見と要望を述べたい。大日野幹事長より，参加者の学校調整について検討との話があり，ありがたく思う。本校の児童も多く参加し，楽しみにしている。学校での調整は，公正を期すため教頭が同席し，クジを引かせると，外れて残念がって帰る児童多い。調整について検討いただき，より楽しい事業になるようお願いしたい。

○授業研修会に参加した。７０名余の参加者で盛会に行われた。箕輪北小での特別支援教育の実践報告，北原和俊先生のご指導及び，授業研修委員の先生方の研究が発表され，勉強になった。また，福井大学松木健一先生の講演で，特別新教育，インクルーシブ教育の重要性について語られたなかで「障がいは，その子にあるのではなく，その子と自分の間にある」との言葉に，新たな子ども観・授業観が与えられた。研修の場を与えていただいた上伊那教育会，研修委員の皆様に感謝したい。

○三大研修で「意義もあるが，負担もある」という意見について，哲学研修に参加した立場から意見を述べたい。先生方にお願いすることが多い研修で，とくにレポートを作成する先生が大変なため，お願いする方も忍びない気持ちだった。「忙しい」「哲学に興味がない」と言われ，進めていくのが大変だった。しかし，私が参加して思ったことは，哲学の垣根の高いイメージと実際の研修とは，かなりちがいがあったということだ。実際に集まった先生たちは，作ったレポートをもとに話をするのだが，話す内容は，教師としてのあり方や児童生徒の見方なので，哲学でなくても事例研究会でもよい。哲学を通して見たときに，自分のあり方，子どもたちへの接し方は，これでよいのか，レポートは悩み考えた提案系の発表で，結局私たちも「どう考えていったらいいのだろう」と終わっていく。ただ集まって，発表を聞いて終わりという会ではなく，とても頭を使う，先生方と考えた会だったと思う。職場でもそのような会はあるかと思うが，いろいろな学校の先生方と話せたのが貴重な機会だと思ったので，哲学というと腰が引けてしまうこともあるが，なかなか集まらず各校で１人とお願いすることもあるが，機会ととらえていただき，そんな会もあるんだと思っていただき，また参加していただきたい。

○研修助成事業について，本年度道徳教育研究会の事務局を務めたことから，助成金のありがたさを感じている。会員数２２名で少数だが，事業内容は同好会の中で一番だと思っている。夏期・冬期研修会で，元校長先生や指導主事を講師にお呼びし，明日の授業につながる方法を学んできた。また，実際の授業を見て研修を深めてきた。道徳が教科化されることを見据え，同好会でも研鑽を重ねてきたが，講師に教えられることが多く，その費用に助成金を使った。また，県道徳学会に加入する際に助成金を使った。正直なところ，県の負担金が大きく，残金で郡の活動をしてきたので，会の運営に制約が生じていた。今回，助成金の格差が均等化されたことは嬉しい。公平感が高まった。しかし，補助が少なくなったとも聞いている。社旗醸成や経費の適正化を考えれば致し方ないが，再来年教科化される道徳は，学校の根幹をなしている。その大切な道徳のためにも，会員を増やし，助成金に頼らずに，研修内容を見直し，自分たちでできることを探して，会を運営していくよう心がけたい。上伊那教育会の理念にある「研修は自ら求めて参加するべきもの」を陰で支えてくれている助成金に感謝し，継続されることにさらに感謝し，限りある助成金を大切に使って，私たちも内容の濃い活動をしていきたい。